

主題 学校のチーム化を目指す組織運営の在り方

副主題 真木小式3サイクル評価システムを通して

添田町立真木小学校
主幹教諭 宮村 歩

こんな手立てによって…

PDCA サイクルと OODA ループのそれぞれの強みを組み合わせた「真木小式3サイクル評価システム」を構築し効果的に機能させることで、

こんな成果があった！

共有化、協働化、共創化の好循環が生まれ、組織的な取組への効果を感じて、実効性のある取組を全員で創る「学校のチーム化」が形成された。

1 考えた

本校の実態として、教員の重点目標（基礎基本の習得と活用力の育成）達成への意識は高いが、個々のベクトルがばらばらで組織的・計画的な仕組みが確立していないという課題があった。そこで、主幹教諭として、本校の教員の意識の高さを生かしながら、組織的・計的に重点目標を達成できる仕組みづくりが必要であると考え、学校のチーム化を目指した。そして、計画(P)と改善(A)段階が強みのPDCAサイクルと実行(D)段階が強みのOODAループを組み合わせた「真木小式3サイクル評価システム」を構築し、それを効果的に機能させようと考えた。

2 やって見た

構築した「真木小式3サイクル評価システム」を効果的に機能させる手立てとして「3サイクルが効果的に機能する環境整備」「素早い観察・把握と臨機応変な意思決定・実行によるSサイクル」「事前打合せとチーム会議運営の工夫によるMサイクル」「校内研修と段階的な評価活動によるLサイクル」の4点から具体化した。取組1では、当事者意識・役割分担、見通し、見える化の視点から環境整備を行った。取組2では、チームまなびによる「家庭学習強化週間」で家庭学習の習慣化と自主学習の質の向上を図った。取組3では、チームこころによる「いきいき生活！QOL週間」で家庭と連携して自分の生活を見直し、基本的生活習慣の改善を図った。

3 成果があった！

- ・ Sサイクルでは、実施状況の把握・分析・公表を行うことで、素早く、臨機応変に改善・実行が進み「共有化」と「協働化」の往還・融合を促すことができた。
- ・ Mサイクルでは、事前の打合せ・協議内容の焦点化・事後の見届け等に留意したチーム会議を行うことで、「共有化」と「協働化」の往還・融合から「共創化」へ高めることができた。
- ・ Lサイクルでは、取組の成果と課題を分析・把握する校内研修をもとに、チーム会議、全体会議と段階的に評価活動を繰り返すことで、「共創化」を連続・発展させることができた。

<目次>

主題 学校のチーム化を目指す組織運営の在り方

副主題 真木小式3サイクル評価システムを通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 学校の実態から	3
	(2) 組織マネジメントの有効性と課題から	3
2	主題の意味	4
	(1) 学校のチーム化とは	4
	(2) 学校のチーム化を目指す組織運営とは	5
	(3) 真木小式3サイクルとは	5
	(4) 真木小式3サイクル評価システムとは	6
3	研究の目標	6
4	研究の仮説	6
5	研究の構想	6
	(1) 3サイクルを効果的に機能させる環境整備	6
	(2) Sサイクルを効果的に機能させる手立て	7
	(3) Mサイクルを効果的に機能させる手立て	8
	(4) Lサイクルを効果的に機能させる手立て	8
	(5) 研究構想図	9
6	研究の実際	10
	(1) 学校のチーム化と3サイクル評価システムを効果的に機能させる環境整備の取組	10
	(2) チームまなびによる「家庭学習強化週間」の取組	12
	(3) チームからだによる「いきいき生活！QOL週間」の取組	17
7	全体考察	22
	(1) 職員意識アンケートの結果から	22
	(2) 取組の成果と課題についての自由記述から	23
	(3) 児童の変容から	23
	(4) 管理職による評価から	24
8	成果と課題	25
	(1) 研究の成果	25
	(2) 今後の課題（方向性）	25
	<参考文献>	25

主題 学校のチーム化を目指す組織運営の在り方

副主題 真木小式3サイクル評価システムを通して

添田町立真木小学校
主幹教諭 宮村 歩

1 主題設定の理由

(1) 学校の実態から

本校は、学級数8（特別支援学級2学級を含む）、全教職員数16名（非常勤教員2名も含む）の小規模校である。そのため、若年教員（経験年数1年目～6年目）であっても高学年の担任として学校を回したり、校務分掌上の主任を任されたりすることも多い。一方、中堅教員（経験年数7年目～13年目）は約6%しかおらず、若年教員が授業づくりや校務分掌上の問題を抱えても、身近に相談できる先輩が少ない状況にある。近接学年会や部会等の時間設定はあるものの、情報を共有したり相談したりする場は十分もてていなかった。

また、標準学力テストの結果の推移を見てみると、平成27年度以降、標準化得点が全国を大きく下回り続け、令和2年度は1段階児童が約7割を占める等「学力向上」が喫緊の課題となっている。年度当初（4月）にとった教員意識アンケートの結果（表1）から、「学力向上の取組」への意識は高いものの、「学校の重点目標や取組の内容・方法の共有」、「チーム（部）の連携や学級での確実な実施」、「取組の評価・改善」に課題が見られた。各チームから重点目標（基礎基本の習得と活用力の育成）達成に向けた様々な取組が提案されてはいるが、個々の教員のベクトルはバラバラで成果が上がらないため、焦燥感や疲労感が募っていた。そこで、主幹教諭として、組織的・計画的に学校の重点目標を達成できる仕組みづくりができないかと考え、本主題を設定した。

表1 教員意識アンケートの結果

(N=12, 13項目, 4件法)		
番号	評価項目	4月
①	学校の重点目標を共有できている。	2.58
②	ゴール像(成果指標)を共有できている。	2.58
③	学力向上に向けた取組の内容や方法を共有できている。	2.67
④	今年度の取組は、重点目標達成のために意義あるものだと考えている。	3.17
⑤	チーム(部)での自分の役割を理解している。	3.08
⑥	自分のチーム(部)のメンバーや、他のチーム(部)のメンバーと協力して活動している。	2.83
⑦	チーム会議や研修では、自分の考えを言ったり、聞いたりしてもらっている。	3.5
⑧	取組の提案に沿って、確実に実施することができている。	2.83
⑨	取組後は評価を行い、成果や課題をつかむことができている。	2.75
⑩	研修や会議で、課題を解決するための改善策を考えたり、話し合ったりすることができている。	3
⑪	みんなで、よりよい取組を創り出そうとする雰囲気がある。	3
⑫	研修や会議で出された改善策は、次の実践に生かされている。	2.67
⑬	組織的に取り組むことは、重点目標を達成するために効果があると思う。	3.08

(2) 組織マネジメントの有効性と課題から

令和元年より2年間、福岡教育大学教職大学院において長期派遣研修員として、「自主・自律を目指す組織運営」について研究を行った。そこでは、学期に2,3回の「小さなPDCAサイクル」と年に3回の「大きなPDCAサイクル」という2つのPDCAサイクルを効果的に回すことが有効であると明らかになった。しかし、学級での実践を徹底することや、より質の高い取組へと更新するためには、即時性のある「OODA ループ」を取り入れた評価システム

の再構築が課題となった。

これまで取り入れてきた「PDCA サイクル」のプロセスでは、まず計画を立てそれに沿って実行し、評価・改善を行っていく。それによって何を実行すべきかがあらかじめ明確になり、評価の観点も分かりやすく、改善点を見つけやすいというよさがある。つまり、計画（P）と改善（A）段階が強みといえるサイクルである。しかし、改善アイデアを思いついた時点ですぐに実行するというわけではなく、計画、実行、評価を行った上で改善に取り組むことになるため、時間がかかってしまうという課題があった。

一方、「OODA ループ」は、計画の立案からではなく、その場の状況を読むことから開始し、分析から実行までをスピーディーにできるというよさがある。また、臨機応変に問題解決に向けた意思決定ができるというよさもある。つまり、実行（D）段階に強みがあるといえるサイクルである。しかし、個人が裁量をもって意思決定をすることができるため、組織全体を統制しづらいという課題や、現在起きている状況を受けて、迅速に解決できるように動き出すプロセスであるため、目標の達成に向けた取組の改善には適用しづらいという課題がある。

以上のことから、これまでの2つの「PDCA サイクル」に、新たに「OODA ループ」を加え、それぞれのサイクルの強みを生かした3つのサイクルを位置づけた評価システムを再構築することが必要だと考え、本副主題を設定した。

2 主題の意味

（1）学校のチーム化とは

学校の重点目標達成に向けて、教職員一人一人が自らの専門性を発揮しながら連携・協力し、教育活動を推進・創造していくことである。

学校のチーム化を図る条件について、福岡県教育センターが発行した『学校変革の決め手』で示された「目的共有」「相互作用」「価値創造」を参考に、本校の実態に応じて「共有化」「協働化」「共創化」（3K）と捉えることとする。その具体的要素について表2に示す。

表2 チーム化の3条件とその具体的要素

条件	要 素	
共有化	目標	全員で、達成すべき目標を共有する
	内容・方法	全員で、目標達成に向けた取組の内容や方法を共有する
	価値	全員で、取組の価値を共有する
協働化	役割分担	各チームにおける個々の役割を明確にする
	コミュニケーション	チーム内やチーム間で連携し、双方向のやり取りをする
	モチベーション	目標に向かって提案されたことを確実に実施する
共創化	成果・課題の把握	取組の成果や課題を把握・分析する
	対話	課題を解決するための改善策を立てる
	共通認識	全員でベクトルをそろえ直し次の取組に生かす

(2) 学校のチーム化を目指す組織運営とは

「共有化」「協働化」が往還・融合しながら「共創化」を生み出し、それが連続・発展していくように「まなび」「こころ」「からだ」の3つのチームのマネジメントを行い、学校の重点目標達成に向けた取組を推進していくことである。

ここでは「共有化」→「協働化」→「共創化」といった一方向的な好循環ではなく、「共有化」と「協働化」が往還しながらそれぞれの要素を高め合い、さらに融合することによって「共創化」が生まれるといった双方向的な好循環である。そして、それが連続・発展していくことで学校のチーム化を図り、さらには学校の重点目標を達成していくことになる（図1）。

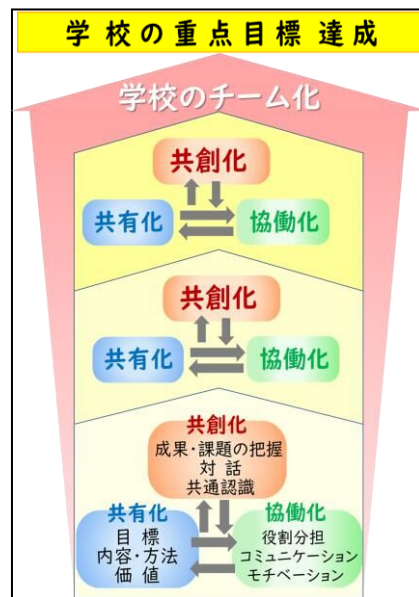


図1 学校のチーム化を目指す組織運営のイメージ

(3) 真木小式3サイクルとは

1つは、学期に一回循環する大きなPDCAサイクル（以下Lサイクルという）である（図2）。係の取組や学級での実践を学校全体の検討に付して、学校全体の取組の評価・改善を図るものである。

2つは、Lサイクルの計画（P）段階に位置づいた小さなPDCAサイクル（以下Mサイクルという）で、月に一回循環するサイクルである（図3）。主にチームの各係が行う取組の評価・改善を繰り返すことによって、チームの取組の効果を高めたり、コミュニケーションを活性化したりするものである。

3つは、Mサイクルの運営・実行（D）段階に位置づいたOODAループによるサイクル（以下Sサイクルという）で、取組途中や取組後すぐに、循環するサイクルである（図4）。日常的なサイクルで、主に学級での実践の評価・改善を繰り返し行うことによって、学級での実践の効果を高めるものである。

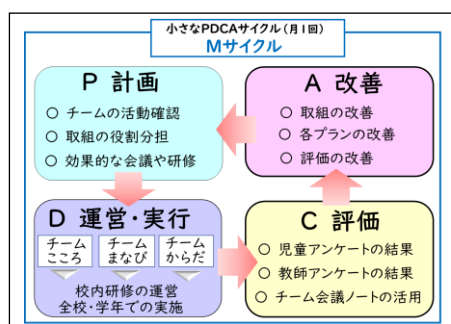


図3 Mサイクル

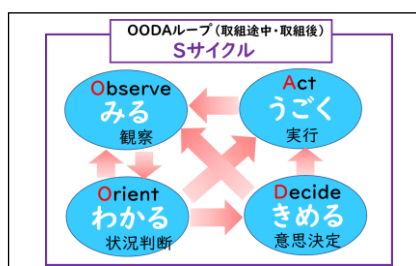


図4 Sサイクル

実践の効果を高めるものである。

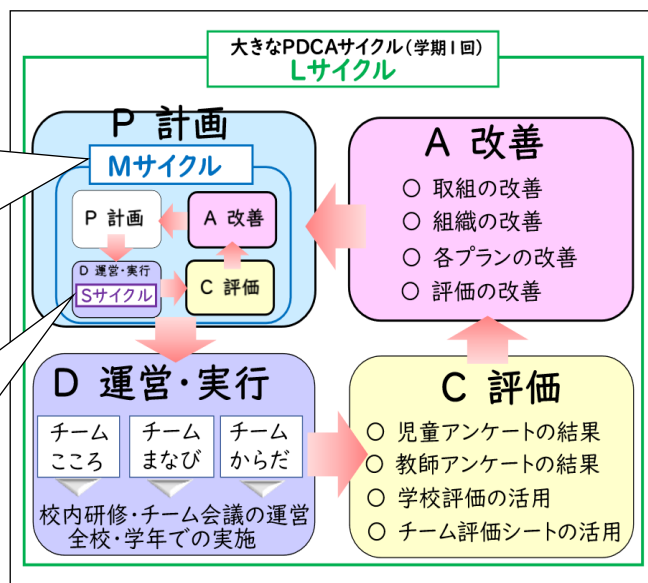


図2 Lサイクル

(4) 真木小式3サイクル評価システムとは

運営・実行（D）段階において、「共有化」と「協働化」を往還・融合させるために、取組途中や取組後すぐに即時評価を行う「Sサイクル」と、計画（P）-運用・実行（D）-評価（C）-改善（A）という「共有化」と「協働化」の往還・融合から「共創化」を生み出す形成的評価を行う「Mサイクル」と、「共有化」と「協働化」と「共創化」を連続・発展させる総括的評価を行う「Lサイクル」を循環させて、真木小学校の重点目標（基礎基本の習得と活用力の育成）達成を目指す評価の仕組みのことである。

3 研究の目標

主幹教諭として、真木小式3サイクル評価システムを構築し、それを効果的に機能させる手立ての具体化及びそれを通じた学校のチーム化を目指す組織運営の在り方を究明する。

4 研究の仮説

主幹教諭として、PDCA サイクルと OODA ループの強みを組み合わせた真木小式3サイクル評価システムを構築し、それを効果的に機能させる手立てを講じれば、「共有化」「協働化」「共創化」が好循環しながら連続・発展し、学校のチーム化を目指すことができるであろう。

5 研究の構想

(1) 3サイクルを効果的に機能させる環境整備(①当事者意識・役割分担②見通し③見える化)

① スローガンの作成・共有 (①)

学校のチーム化を図るために「共有化」「協働化」「共創化」(3K)をキーワードに取り組んでいくことをトップダウンではなく、全員が自分事として意識できるように、真木小スローガンを作成し、掲示する。

② チーム評価シートの作成(①②③)

重点目標達成に向けて、校務分掌上に「こころ」「まなび」「からだ」の3つのチームで構成されたプロジェクトチームが組織された(図5)。3つのチームの役割を明確にし、取組が具体化されるよう、チームリーダーを中心に評価シートを以下のような手順で作成する。

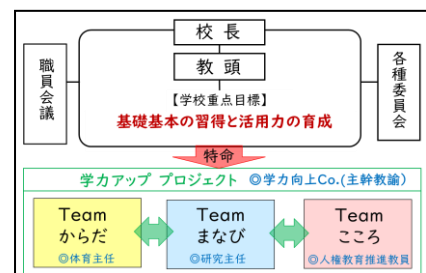


図5 プロジェクトチーム組織図

ア 校長が示した学校経営構想にある「教育課題」や「各チームの重点目標」を基に、それぞれのチームの重点目標を設定することでつながりを意識させる。

※学校の重点目標を達成するために自分たちのチームは何を目指すのか。

イ チームの重点目標から各係の重点目標と具体的方策について協議し設定する。

※チームの重点目標を達成するために、どんな取組を行えばよいのか。

ウ 各係の具体的方策の成果や課題を見とる評価方法について協議し設定する。

※具体的な方策が有効であったかを何で見とればよいのか。

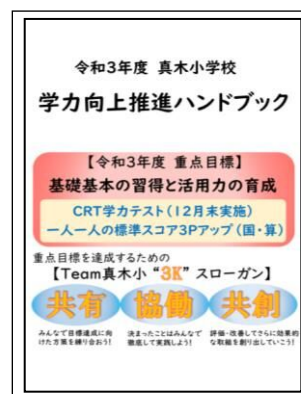
エ 前年度の評価結果を基に、評価基準を4段階で設定する。

※どのくらいの評価を得られれば具体的な方策が有効だったといえるのか。

③ ハンドブックの作成 (123)

各チームで策定した具体的な方策が、一つ一つ点ではなく線としてつながるように、各チームの取組を集め、目標、内容、方法、支援体制等を明確にしたハンドブックを以下のような項目で作成する(資料1)。

- I 学力に関する児童の実態と課題
- II 真木小学校で目指すゴール像
- III 令和3年度「学力向上推進構想図」
- IV 学力向上の具体的な取組について(13の取組の具体)
- V 学力向上の取組の評価計画



資料1 ハンドブック

④ 活動計画一覧表の作成 (123)

各チームが主体的に係の取組を推進したり、係間で連携・協力したりするためには、それぞれの活動の見通しをもつ必要があると考え、学期ごとにチームの活動計画をまとめた一覧表を作成する。活動計画一覧表は、随時、活動の確認や付加・修正等ができるように、職員室の入り口に拡大掲示しておく。

⑤ チーム掲示板の活用 (3)

各チームの活動状況が見えるように、チームの掲示板を設置し、活用する。掲示板は、教職員だけでなく、児童や保護者とも共有できるように、児童昇降口に近く、通行が多い場所に設置する。取組後の様子を写真で掲示したり、取組後の変容やアンケート結果等を知らせたりする。

⑥ チーム真木小「3K」通信の発行 (3)

各チームで提案したことが各学級でどのように実践されているかを見える化するために、月に1回、チーム真木小「3K」通信を発行する。それぞれの学級で取り組む様子や工夫等を紹介したり、取組後のアンケート結果や児童・担任の声等を掲載したりする。

(2) Sサイクルを効果的に機能させる手立て

① 実施状況の素早い観察・把握

Sサイクルは、取組途中や取組後すぐに行う即時評価である。意思決定や実行につなげるために、実施状況を素早く観察・把握すること大切である。観察では、担任だけでなく、取組の担当や担任外、管理職等多くの目で見て、状況判断できるような仕組みづくりを行う。例えば、取組カードを複数でチェックする支援体制をつくる、取組状況を数値またはグラフに表して見える化し、職員室の黒板に掲示して共有する等の工夫を行う。

② 臨機応変な意思決定・実行

取組期間中は、放課後になるべく会議や研修を入れずに、近接学年会等の場を設定し、個々に把握した課題から改善案を話し合えるようにする。あるいは、休み時間に担当と担任がインフォーマルに話し合い、その日の内に改善を図る。学年の課題については、児童と担任が課題を共有し、学年独自の改善策を講じることもある。Sサイクルでは、様々に小さな共有化と協働化を繰り返しながら臨機応変に改善を図っていきけるようにする。取組後に効果があった改善策を全体で共有し、Mサイクルへとつなげていくようにする。

容に至った要因を分析・考察し、取組の成果や課題をまとめていく。全員で、成果や課題を見いだしていく過程で、より効果ある改善策の策定（共創化）に向けた共有化や協働化を高めていく（資料3）。

② 段階的な評価活動

Lサイクルは、学期ごとの総括的評価となるサイクルである。そのため、段階的に丁寧な評価活動を行う。学力量向上研修で整理された成果と課題を受けて、実践を振り返り教員の自己評価を行う。さらに、学校評価との関連も図っていく。評価活動を重ねる中で、児童の実態や、取組の内容・方法、成果と課題等を繰り返し共有化し、チーム会議での評価・改善につなげていく。チーム会議

では、児童・教員の自己評価や学校評価等をエビデンスとしながら、計画された評価方法や基準をもとに、各係の取組が有効であったかについて評価を行い、具体的な方策を立てていく。ここでは、取組自体の改善だけでなく評価基準や方法の見直し、さらには、全体会議で組織体制の見直しも行い、次学期により効果的な取組ができるよう、共創化を図る。

児童変容の要因分析

児童アンケートの評価結果から、特に成果となる項目3つと、課題となる項目3つを選び、なぜそのような結果になったかという要因について話し合います。

要素：成果となる評価項目	児童評価

要素：課題となる評価項目	児童評価



資料3 学力量向上研修の流れ

(5) 研修構想図 (図7)

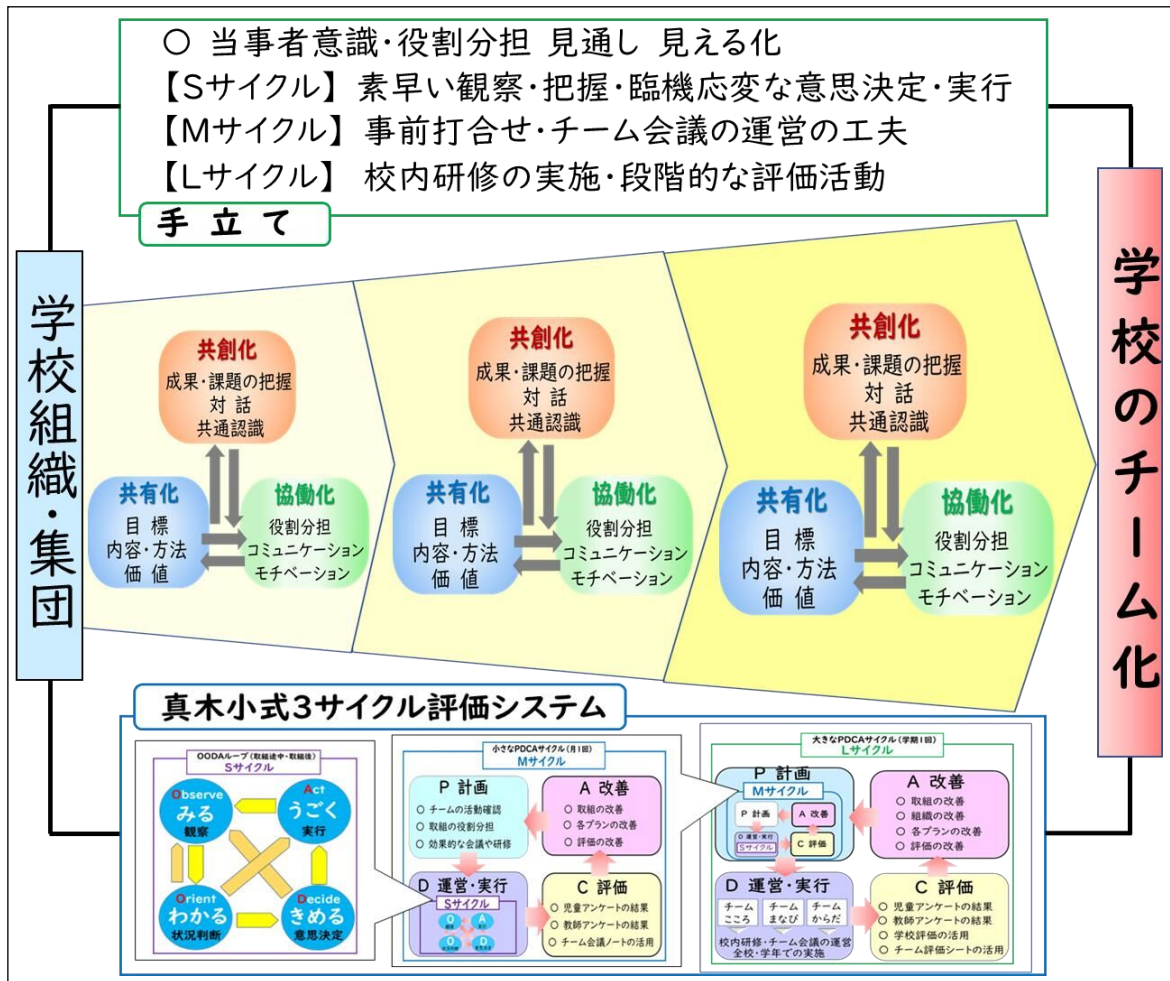


図7 学校のチーム化を目指す研究構想図

6 研究の実際

(1) 学校のチーム化と3サイクル評価システムを効果的に機能させる環境整備の取組

① スローガンの作成・共有

「共有化」「協働化」「共創化」(3K)を自分事とし、意識して活動できるように、一つ一つの言葉の意味を考え交流する場を設定することで、スローガンの意味や価値等を具体的に捉えられるようにした(資料4)。また、職員室に常時拡大掲示することによって、見える化を図り意識が継続できるようにした(資料5)。

スローガンを作成し、一つ一つの言葉を解釈し交流する中で、重点目標を達成するためには「同じ方向を向くことが必要」「他学年の課題も自分の課題として捉えて一緒に取り組む」「評価と改善をセットにして取組を更新し続ける」といった意味を共有化することができた。また、「組織的な取組にしなくてはならない」「3Kを常に意識して頑張る」等の声が聞かれ、今後の取組の協働化に向けた意欲の向上を図ることができた。

P ↓ D ↓ C ↓ A	共有	皆で取組の目的・内容・方法をしっかり共通理解する。 ベクトルをそろえて取り組むことが大切である。
	協働	提案された取組は、皆で徹底してやらなければならない。 できない場合は、協力しあってできるようにフォローしていく。
	共創	やったことの効果を検証し、課題については改善策を講じる。 よりよい取組を皆で一緒に創り出していく。

資料4 3Kの言葉の意味の交流

【令和3年度 重点目標】
基礎基本の習得と活用力の育成
CRT学カテスト(12月末実施)
一人一人の標準スコア3Pアップ(国・算)

学力・体力の
基盤づくり

活用力を育成
するための
授業づくり

規範意識の育成
と自他を認め
合う集団づくり

【Team真木小“3K”スローガン】

共有 **協働** **共創**

全員で目標達成に向 決まったことは全員で 評価・改善して更に効果
けた方策を繰り返そう! 徹底して実践しよう! 的な取組を創り出そう!

資料5 職員室前面掲示

② チーム評価シートの作成

近年の課題から、学校の重点目標が「学力向上」に関わる内容であるため、校務分掌におけるチーム「まなび」の役割は明確であるが、「こころ」と「からだ」の役割が不明確で、ベクトルがそろわないという共有化と協働化に関する課題があった。

そこで、資料6のような評価シートを作成した。作成を通して、「係の重点目標」→「具体的方策」→「評価基準・方法」→「改善策」と1学期に1周回る大きなPDCAサイクル(Lサイクルを)が意識づけるようにした。チーム内で一つ一つの取組の目標・内容・方法等を検討していく中でしっかりと共有化することができた。また、他のプラン(学力向上プラン等)や評価(学校の自己評価等)を活用することによって、チーム外の係とのコミュニケーションも図られた。さらに、作成したシートを全体会議の場で再度、検討・確認することによって、全員で取組の具体を共有化することができ、協働化の意識も高まった。

2 学校経営構想に基づく教育課題と重点目標

《教育課題》○自ら進んで学習に向かう態度が乏しい ○自尊感情が低い ○適切な行動を自分で考え判断することが難しい
《重点目標》(1)地域のひと・もの・ことを活用したふるさと学習の推進 ・主体的に追求する態度の育成
(2)道徳教育等の推進 ・自尊感情の高揚
(3)生徒指導等の充実 ・自己指導能力の向上及びいじめ・不登校等の解消

3 各係の重点目標と具体策及び評価

係名	係の重点目標	具体的方策	具体的方策の評価基準	評価方法	1	2	3	課題と改善策
生活総合的な学習	○自ら課題を設定し、探究的な見方・考え方を働かせ、主体的に課題を解決していくための資質・能力を育成する。	・地域のひと(GT)・もの・ことを活用した「ふるさと学習」を設定し、基底カリキュラムに基づいた実践を行う。	A 自己評価の平均が3.2以上	総合的な学習の授業アンケート(教師):4件法				
			B 自己評価の平均が3.0以上					
			C 自己評価の平均が2.8以上					
			D 自己評価の平均が2.8未満					
道徳教育	○児童が、自分のよさに気付き、よさを認めることを通して、自分有用感・自己調整	・自尊感情の高揚に関わる内容項目を重点化し、毎学期児童に対してアンケートを実施する。 A:個性の伸長 B:相互理解・寛容 C:勤労・公共 A:努力・強い意志	A 重点項目の自己評価3.2以上	生活アンケート(4件法)				
			B 重点項目の自己評価2.8以上					
			C 重点項目の自己評価2.4以上					
			D 重点項目の自己評価2.4未満					

資料6 チームこころの評価シート

③ ハンドブックの作成

各チームで立てた具体的な方策が、一つ一つ点ではなく線としてつながるように、各チームの取組を集め、目標、内容、方法等を明確にしたハンドブックを作成した(資料7)。取組の担当者や実施日、支援体制等を明確にすることで、一人一人が見通しをもって計画できるようにした。また、自分の係だけではなく、全体の取組の見える化を図り、連携して推進できるようにした。さらに、取組の改善に伴い、プランに付加・修正があれば差し替えができるように、ルールファイルに綴じるようにした。

一人一人が携帯し、ねらいや内容、方法等を確認しながら取組を進める姿が見られた。また、役割分担が明確になり、担当や関係学年と連携して活動する姿も見られるようになった。学年で取組にずれが見られる時は、ハンドブックに沿って方向性を確かめることもあり、協働化への意識を高めることができた。

5. 朝の活動について(提案:5月 主担当: A・B)

○ 協を活動とし、一日の学習のモチベーションアップを行う。
 ○ 継続的に漢字や作文、計算などに取り組むことにより、活用に向けた基礎的な知識・技能の習得を図る。

(1) 時間
 ○ 8:25~8:40の15分間(月曜日~金曜日) ※今年度は5月17日(月)より開始

(2) 内容
 ○ 月・水…計算と漢字 ※道東チャレンジ後の第2・第4月曜日は、4~6年・各5分を合わせ、1~3年:読書
 ○ 木 …読書(運動・活動の目的のスキルアップ)
 ○ 金 …作文(読書・書く力の育成)

(3) 活動の流れと留意点(月~木)

時間	活動	留意点
8:24 8:25~28 (3分間)	① 朝の活動開始の挨拶を行う。 ② 計算をする。 「計算持つて」 「プリントの読を持って」 「用意:はじめ」	○ 始まる前に参加用具と計算・漢字のプリントを準備しておく。 ○ 朝の活動開始の挨拶を行う。 ○ 正解への一歩の問題を活用する。 ○ 正確さと速さを求めて、実施する。 ○ 間違えたところを、強引に訂正せず、二重線等を用いて、正しい答えを書かせる。
8:28~30 (2分間)	③ 答え合わせをする。	○ 担任や学年主任等を呼びよせたり、学校の実情に応じて行う。
8:30~33 (3分間)	④ 漢字を書く。	○ 当該学年の問題から10問程度準備する。 ○ 書く前から朝のプリントに漢字の練習をする。
8:33~35 (2分間)	⑤ 答え合わせをする。	○ 解答を転写して、自己採点させる。
8:35~40 (5分間)	⑥ やり直しをする。 やり直さず。 「朝の活動終了の挨拶を行う」	○ 当該学年の問題から10問程度準備する。 ○ 多くの児童が間違えている問題は解説をする。 ○ やり直しが終わった後は、各自学習や読書など時間いっぱい取り組ませる。

※ 本と金は、開始の挨拶(8:25)→個別にプリント学習を始める(1枚目のプリント→教師が先付け指導→2枚目のプリント…と繰り返して)→終了の挨拶(8:40)

※ プリントの準備・印刷は担当で行う。(計算:A・漢字:B・読書:C・作文:D)
 ※ 廊下に各学年の朝活ボックスを設置する。順番番(職員室の黒板に書いてある)と同じ引き出しに朝活のプリント(5枚目)をいれ替える。

(4) 各学年の指導体制(月~金)

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	特設学級
担任:A	担任:B	担任:C	担任:D	担任:E	担任:F	担任

(5) 評価
 ○ 毎年1学年コンクールによる個人・集団と学年表彰(年3回)
 ○ 計算…未来への一歩診断テスト(年3回)

資料7 ハンドブック(朝活)

④ 活動計画一覧表(学期毎)の作成

チーム活動計画一覧表(資料8)の作成にあたっては、主に次のような工夫を行った。

- 3つのチームの活動の関連が見えるように、横並びにして表記すること
- いつ・だれが・どの場で提案等を行うのかを明確にすること
- PDCAサイクルが確実に回るように、一つの活動ごとに協議・提案・実施・評価・改善の場を設定すること

チ←チーム会議 職←職員会議 終←終会 研←研修
 校←校務運営委員会 推←推奨委員会 生←生徒指導委員会

協←協議 提←提案 実←実施 評←評価 改←改善

月	日	会議	TEAM ころも(担当係・名)	TEAM まなび(担当係・名)	TEAM からだ(担当係・名)	各種委員会(担当係・名)
5	チ		各チーム重点目標確認・1学期活動計画(各チーム長)	4月の活動内容の協議・役割分担等(担当係)		
			学級経営研修(人権・児童支援・AB) 自尊感情に関わるアンケート(道徳教育・A)	学力向上研修①(研修・学力基盤・宮村) 学力向上推進ハンドブック(プロジェクトリーダー・宮村)	新体力テスト・研修(体力向上・F) スポコン広場(体力向上・F)	
6	研			全国学調・NRT強化週間(学力基盤・D) 学力向上研修①(研修・宮村) 学力向上推進ハンドブック(プロジェクトリーダー・宮村)		
5	7	職	自尊感情に関わるアンケート(道徳教育・A)	全国学調・NRT強化週間(学力基盤・D)	新体力テスト・スポコン広場(体力向上・F)	
	13	研	学級経営研修(人権・児童支援・AB)			
	19	評	自尊感情に関わるアンケート(道徳教育・A)	全国学調・NRT:児童アンケート(学力基盤・D)		
	20	推	いじめに関するアンケート(生徒指導・C)			今年度研究構想(研究主任・F)
	26	生		4月の取組の振り返り(担当係)	5月の活動内容の協議・役割分担等(担当係)	アンケート結果・児童の実態交流(生徒指導・C)
			学級経営研修(人権・児童支援・AB) 道徳教育・道徳科授業の見直し(道徳教育) 特別支援教育研修(特別支援・A)	学力向上研修①(研修・宮村) 全国学調・NRT強化週間(学力基盤・D) 家庭学習強化週間(学力基盤・E)	AED・アレルギー研修(健康安全・G) 避難訓練・火災(健康安全・H) いきいき生活 QOL 週間(基本的生活習慣・G)	

資料8 チーム活動計画一覧表

作成の手順は、まず、チーム会議を開いて、活動内容を設定した。次にチームリーダーがそれぞれの活動計画を持ち寄り、確認・調整を行って一覧表にまとめていった。最後に、一覧表を全体会議にかけて、最終確認を行い全員で共有化を図った。活動計画一覧表は、活動の確認ができるように、職員室の入り口に拡大掲示した。チームの活動が見える化することで、見通しをもって計画的に資料の作成や提案の準備等を行えるようになった。また、チーム内で話し合ったり、チームリーダーが連携を確認したりする等、チーム内外で



資料9 連携を話し合う様子

のコミュニケーションが活性化し、協働化への意欲が高まった（前頁資料9）。

⑤ チーム掲示板の活用とチーム真木小「3K」通信の発行

各チームの活動状況や、チームから提案されたことが各学級でどのように実践されているかを共有化できるように、掲示板の活用と通信の発行を行った。

「まなびの掲示板」では、学びの基盤づくりや強化週間の取組等で児童が頑張っている姿を写真で紹介したり、漢字・計算コンクールの結果や開催日時をお知らせしたりした（資料10右）。「からだ掲示板」では、体力向上や健康についての取組について、めあてや振り返りを掲示したり、生活習慣改善の取組の結果や変容をお知らせしたりした（資料10左）。自分のチームの取組が全ての学年で確実に実施されていることを確認したり、他チームの取組状況を具体的に把握したりすることができた。また、児童と教師が掲示板の前で足を止め、話し合う姿もよく見られた。「6年生の取組はすごい」、「コンクールに向けて漢字を頑張ろう」等、児童と教師間の共有化や協働化も高まっていく様子がみられた。

チーム真木小「3K」通信では、学級での取組や研修の様子、取組後のアンケート結果や児童・担任の声等を掲載し、「共有」「協働」「共創」することのよさを感じられるようにした。この通信を休憩室に掲示することで、お互いの取組のよさを賞賛し合ったり、取り組み方を教え合ったりする姿が見られ、インフォーマルなコミュニケーションが活性化した。また、取組状況や工夫を共有することで、経験の少ない教師でも見通しをもって活動することができるようになり、どの学級でも確実に取組が実施され、協働化が促進された。



資料10 チームまなびの掲示板（右）チームからだの掲示板（左）

以上①～⑤の取組を行ったことによって、「目標、内容・方法、価値の明確化」「当事者意識の高まり」「役割の明確化」「活動の見通し」「コミュニケーションの活性化」等、「共有化」と「協働化」を高める要素が生まれ、3つのサイクルを機能させる原動力となった。

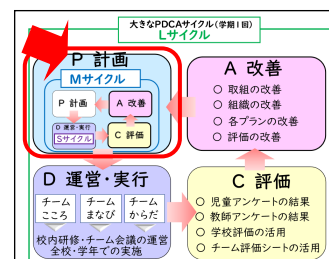
(2) チームまなびによる「家庭学習強化週間」の取組

【チームまなび重点目標】(2) 学力の基盤づくり ・基礎基本の定着と学習の習慣化

【学力基盤系の重点目標】○ 家庭学習の習慣化や意欲の向上を図るとともに、自主学習の質の向上を図る。

① M・Lサイクルの計画（P）段階

家庭学習強化週間は、学期に1回、一週間の取組である。これまで実施されてきたが、家庭学習をする・しないのチェックに終わっていたため、取組期間だけで日常化が図れない、家庭学習の質の向上まで至らないといった課題があった。それは、



取組の目標・内容・方法等の共有化や、児童や保護者との協働化が十分できていなかったことに起因する。そのため、チーム会議で協議し、以下のような工夫を図ることにした。

- ア 家庭学習強化週間に取り組む目的、目標、価値を児童と共有できるようにする。
- イ 家庭学習の内容や方法（取り組み方）を習得できるようにする。
- ウ 保護者を巻き込み、協働的に取組を推進できるようにする。

ア 取組の目的、目標、価値を児童と共有するための手立て

家庭学習強化週間を始める前に、取組の目的等を共有化する事前交流会の場を設けた。4～6年生には、プレゼンテーションを作成し、家庭学習の目的や価値などを伝えた後、この取組を通して「どうなりたいか」、「そのために何を頑張るか」等を児童に話し合わせた（資料11）。「あきらめずに最後まで頑張りたい」「難しいことにチャレンジしたい」といった目標を立て、そのために、「しっかり計画を立てて取り組む」「自学で難しい問題に挑戦する」といった取り組み方の見通しをもつことができた。



資料11 事前交流会の様子

イ 家庭学習の内容や方法（取り組み方）を習得するための手立て

児童が主体的に家庭学習に取り組むようになるためには、学習の内容や方法が明確になっている必要がある。そこで、学年ごとに「家庭学習の手引き」（資料12）を作成し、配付することを提案した。

これまで家庭学習の内容や量等は、担任の裁量に任せられてきた。手引きを作成する過程で、学習時間や内容、方法等、学校全体で統一するところや系統性を見直すところが明らかになった。また、それぞれの学年の実態や課題を再度共有化し、学校全体としてどのような家庭学習に取り組ませると効果があるのかということ協働することができた。児童に内容や方法を習得させるだけでなく、全員で家庭学習の目標・内容・方法等を協議し共有化を行い、協働的に作成することができた。

ウ 保護者との協働化を促す手立て

本校では、家庭学習に無関心であったり、うまくできない時に叱ってしまったりする保護者が多い。そこで、家庭学習を頑張る児童との関わり方を、「お家の方にご協力いただきたい5つのポイント」として示した「お家の方への手引き」（資料13）を作成し、配付することにした。

また、児童が毎日「学習前の約束」と「自分のめあて」と「学習時間」について自己評価を行う「家庭学習がんばりカード」を作成し、保護者のチェック欄を設けて、

家庭学習の手引き 5年生

5年生の学習で大切なこと ▶ 自分で工夫して

【学習時間】 毎日60分をめてに学習します。
【学習内容】 宿題：プリント1枚（表：算数・うら：国語）
 自学：方眼ノート1P以上 スキル：漢字または計算1P

☆ 家庭学習の前に ☆

- 学習できる時間になったらすぐに家庭学習を始めます。
- テレビのスイッチを切って、ゲームやスマホは近くにおきません。
- 学習する場所をきれいに片付けます。
- 正しい姿勢で、正しくえんぴつをもって学習します。

☆ 家庭学習のやり方 ☆

学習内容	やり方
算数プリント（おもて）	左半分は、4年生までの学習の復習をします。右半分は、授業で学習した問題の復習をします。分からない時は、教科書やノートを見ながら学習したことをたしかめたり、時を先生に聞いたりしましょう。
国語プリント（うら）	文章の読み取りをします。まず、大切な所に線を引ながら問題をよく読みましょう。次に何を聞かれているかよく考えて答えましょう。
自学	例、学習していることを復習したり、自分の興味のあるテーマについて調べたり、苦手なことを練習したりしましょう。大切な言葉を色分けしたり、見やすく表に整理したり、図を使って説明したりして工夫しましょう。
スキル（漢字・計算）	（漢字） どの、はね、はらひを音讀して、ていねいに練習しましょう。（計算） 分からないところを教科書で確かめながら、練習問題を解きましょう。解き終わったら、見直しする習慣も身につけてください。

☆ 家庭学習の後に ☆

- 書き忘れがないか、ていねいに書いているかなどを自分でチェックしましょう。
- お家の人に家庭学習を見せましょう。
- えんぴつや筆、赤えんぴつをけずりましょう。
- 家庭学習をカレンダーに入れ、時間割や連絡帳を見て、明日の準備をしましょう。

資料12 家庭学習の手引き

お家の方へ

6月21日（月）～6月25日（金）は第1期「家庭学習強化週間」です。
 学校と家庭が協力して、子どもたちの家庭学習を応援できるように、「家庭学習の手引き」を作成しました。いつも目にする場所に掲示するなどして活用くださいますよう、よろしくお願ひいたします。

☆ お家の方にご協力いただきたい5つのポイント ☆

- 1 決まった時間に毎日学習する**
 ○ 家庭学習は毎日続けることが大切です。習い事やお出かけ等で難しい日もあるとは思いますが、短い時間でも、必ず机に向かい習慣を身に付けてください。
- 2 決められた時間を集中して学習する**
 ○ 学習を伸ばすためには、集中して学習に取り組むことが大切です。学習に応じて決められた時間を集中して勉強できるように、声かけをお願いします。
 1年～20分 2年～30分 3年～40分 4年～50分 5年～60分 6年～70分
- 3 静かに学習できる環境をつくる**
 ○ テレビを見ながら、おやつを食べながらなどの「ながら学習」は効果が上がりにません。子どもが集中して学習に取り組めるように、ご家族の協力をお願いします。
- 4 子どものがんばりを認め、ほめて励ます**
 ○ 子どもたちが学習したことに対してできるだけ目を通し、声をかけてあげましょう。お家の空気が暖かくなると、頑張った分だけ、自信がつかせ、もっと勉強を頑張るようになります。子どもたちの努力やよい、変化などに目を向け、声をかけてあげてください。
- 5 生活のリズムを整える**
 ○ 生活のリズムを整えることが学力向上につながります。様々な調査から分かっています。子どもたちが持っている力を十分に発揮できるように「はやね はやおき あでごはん」をよろしくお願ひします。

資料13 お家の方への手引き

児童の頑張りを賞賛したり、励ましたりできるようにした（資料14）。

手引きを配付したりサイン欄を設けたりすることによって、お家の方が家庭学習に関われるように工夫した。教員

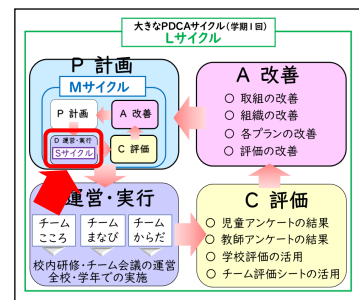
資料14 「がんばりカード」のお家の方のサイン欄

もコメントを書いたり、通信や家庭訪問等で知らせたり、児童の頑張りをお家の方と共有化しながら、児童、保護者、教員間で協働的に取り組んでいくことを確認できた。

以上3つの工夫から、丁寧に計画（P）を行うことによって、教員の共有化と協働化への意識が高まった。

② Mサイクル実行（D）段階におけるSサイクルの循環

OODA ループの観察（O）段階では、「がんばりカード」から、学習前の約束・めあて・時間を意識できているか、お家の方は協力してくれているかなど、児童一人一人の取組状況を素早く把握しなければならない。そこで、担任外で学年の担当を決め、自己評価の結果をエクセルに打ち込み、一覧表やグラフを作成して、職員室の全面黒板に掲示し、共有化



できるようにした。一同に集まって話し合う時間はないため、グラフや表の下に「評価・改善シート」を貼って、「よかったこと」「改善が必要なこと」「改善案」という3項目について、気がついたことを空いた時間に付箋に書いて貼ってもらうことにした（資料15）。

「家庭学習強化週間」1日目 取組状況				
☆ カードを提出した児童の割合:95%				
☆ 約束を守れた児童の割合:95%以上				
☆ めあてを達成した児童の割合:90%以上				
☆ 保護者がサインをくれた割合:70%以上(一言コメントをくれた割合:70%以上)				
☆ 6/21(月)分 欠席(1年:1名 5年:2名 6年:1名)				
学年	カード提出	約束守れた	めあて達成	サイン【一言記述あり】
1年生	100%	100%	100%	100% (33%)
2年生	100%	91.7%	100%	100% (58.3%)
3年生	100%	100%	100%	80% (40%)
4年生	100%	100%	80%	100% (40%)
5年生	100%	88.9%	88.9%	88.9% (22.2%)
6年生	91.7%	91.7%	75%	75% (25%)
支援学級A	100%	100%	100%	50% (50%)
支援学級B	100%	100%	100%	100% (0%)
全校	98%	93.9%	89.8%	87.8% (30.6%)

資料15 取組状況を把握する様子

状況判断（O）の段階では、放課後に、近接学年会議等を設定することもあるが、職員室にある円卓に表やグラフ・改善シート等、話し合う資料を置き、インフォーマルに話し合いができるようにした。この時は、上学年の自学に対するめあての達成度が低いこととお家の方の協力が十分ではないという主に2つの課題が共有化された。

意思決定（D）段階では、上学年担任と取組担当が集まり、2つの課題を解決するための改善策が話し合われた。自学に対するめあての達成度が低いことについては、児童も担任も「どのような自学をすれば（させれば）よいのか分からない」という困り感があったため、自学の評価の観点を話し合っ、評価の見える化を図ることにした。お家の方の協力が十分ではないという課題に対しては、「お家の方への手引き」を読んでいないであろう

家庭に、個別にアプローチをかけて協力をお願いすること、「がんばりカード」と「お家の方への手引き」をリングで結んで、サインをもらう際に読んでもらうという改善策を立て、全担任と共有化を図った。

実行(A)段階では、評価の見える化を図るために、「自学名人への道」(資料16)を作成した。お家の方の協力を仰ぐために「がんばりカード」と「お家の方への手引き」を結ぶ作業や、通信で協力をお願いする文章づくりは分担して行った。全員で課題を共有化し協働的に作業することで、その日の内に改善が施され、翌日には児童の指導に生かすことができた。翌日から、児童は評価の観点に沿って自学の内容を工夫できるようになり、教員も同じ基準で評価をして、自学コーナーに全員掲示を行うようにした(資料17)。その結果、自学への意欲が高まり、質の向上が見られるとともに、めあての達成率も上昇した。保護者の協力についても、改善策

資料16 改善策となる「評価の観点」

資料16 改善策となる「評価の観点」



資料17 自学コーナーの様子

表3 家庭学習強化週間の結果

☆ 6/23(水)分 欠席なし

学年	カード提出	約束守れた	めあて達成	サイン【一言記述あり】
1年生	100%	100%	100%	100% (75%)
2年生	100%	100%	100%	100% (83.3%)
3年生	100%	100%	100%	80% (20%)
4年生	100%	100%	100%	100% (40%)
5年生	100%	100%	90.9%	90.9% (72.7%)
6年生	84.6%	76.9%	76.9%	84.6% (38.5%)
支援学級A	100%	100%	50%	50% (50%)
支援学級B	100%	100%	100%	100% (0%)
全校	96.2%	94.3%	90.6%	90.6% (56.6%)

↑ 上学年のめあて達成率の上昇

↑ 一言コメントの増加

を講じる中で、児童の頑張りを応援する一言コメントが増えていった(表3)。

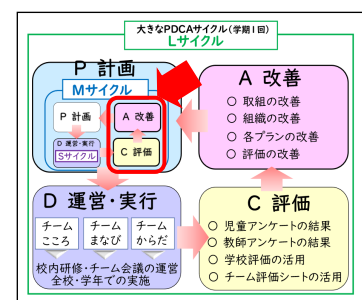
次に見とった課題は、6年生児童への働きかけをどうするかであり、成果や課題の共有化と課題解決に

向けた協働化を繰り返しながら、取組の質を高めていくことができた。

② Mサイクルの評価(C)・改善(A)段階

Mサイクルの評価は、月に1回実施されるチーム会議で行う。実施結果を表・グラフにまとめたものや、児童と教師にアンケートをとって結果をまとめたもの等を準備し、チームで評価を行った。その結果、「事前指導・事後指導の充実」「個に応じた評価方法の工夫」「厳しい家庭との連携」といった3つの課題が明らかになった。これらの課題を解決するために、チームで改善案を協議・整理し、全員でより効果ある取組へと更新できるように近接学年会議(資料18)へとつなげていった。

近接学年会議では、チームで策定した改善案を実態に合わせてより具体化していった。その後、



家庭学習の日常化を図るために今後のめあてをもたせたい。

資料18 近接学年会議

協議した具体的方策を、全体で交流し検討することで、共創化が図れるようにした。改善策が確定したら、すぐに担当が元のプランを付加・修正して、更新を行うようにした。資料 19 のように「学力向上推進ハンドブック」も変更点分かるように赤字で書き直して、差し替えを行った。これが L サイクルの計画 (P) 段階へとつながることになった。

(2) 具体的な取組
【宿題について】(1~6年生)

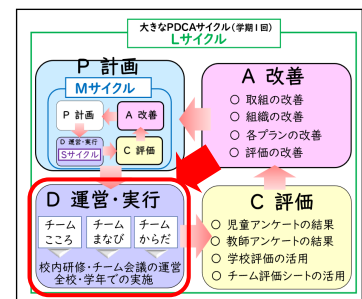
- 目標が達成できた児童にシールやスタンプで頑張りを評価したり、コメントを書いてアドバイスしたりする。
 - ・ 担当が評価のコメントを入れる→担当が取組状況(達成率等)を見える化する
- 家庭学習強化週間が終了した次週の火曜日に事後指導を行う。
 - ・ 1~3年生:各学級で担当が朝活の時間に、リフレクションを行う。(ふりかえり・今後のめあて)
 - ・ 4~6年生:①強化週間での成長(ノートや写真や感想から)をまとめ、家庭学習の目的(ねらいと価値)を確認する。※プレゼンを作成した全体指導
 - ②縦割りで5人程度のグループに分かれて、自学交流会を行う。(ふりかえり・今後のめあて)

改マークを入れて、再配付し、ハンドブックの差し替え。改善後、改善済みフォルダーに保存。

資料 19 Mサイクルにおけるチームの取組の改善

④ L サイクル実行 (D) 段階

Mサイクルで立てた改善策の内、家庭学習の頑張りを日常化させる等、すぐに実行可能な方策については、素早く具体化が図れるように連絡・調整を行った。上学年は、事後指導として6年生をリーダーとする縦割り班を構成し、自学交流会を実施した。家庭学習強化週間で取り組んだ自学ノートを交流することで、友達のよいところを参考にして今後の学習



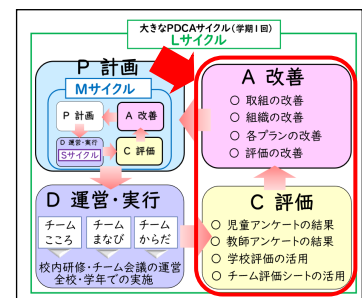
に生かしたり、自分の頑張りを振り返ってめあてを立てたりすることができた。教師自身も日常化を意識するようになり、学年独自に、週一回の自学交流会を開いたり、レジェンドノートの掲示を行ったりと活動が広がった。また、6年生が縦割り班のメンバーに、めあてに沿ったアドバイスをする等、児童の間でも評価サイクルが回り始めるようになった。

Sサイクルで繰り返してきた共有化と協働化が、Mサイクルでさらに質を高めて繰り返されることで、よりよい取組へと更新されていく共創化を生み出し、Lサイクルでは、取組の実行に深まりや広がりが見られた。

⑤ L サイクルの評価 (C)・改善 (A) 段階

Lサイクルでの評価・改善は、学校全体の取組の改善につなげるため、3つの段階を踏んで、丁寧に行っていた。

1段階では、チームまなびが「学力向上研修」を企画・運営する。その事前準備として、ハンドブックに掲載している評価計画に基づき、「児童アンケート」を実施し、結果を表やグラフにまとめた。研修では、結果を基に、全員で児童の



変容やその変容に至った要因について分析・考察を行った(資料 20)。最後に、研修で共有した成果と課題を根拠にして、自分の実践を振り返り、教員の自己評価を行った。

2段階では、1段階での研修結果をまとめた資料を基に、チーム会議を開き、評価シ



資料 20 学力向上研修における要因分析

トを活用して評価・改善を行った。家庭学習強化週間については、表4に示すように、Mサイクルで講じた改善策である事後指導に効果が見られたため、縦割り活動や自学交流会を継続し、事前・事後指導を計画的に行うこと等が話し合われた。また、評価基準が学校の実態に依拠していないという課題から、評価基準の見直しも行われた。前段階を経て、要因、成果や課題等の共有が十分できているため、取組の自体の改善策はもちろん、評価基準や方法、指導体制等の改善策も出され、共創化の意識が促進された。

表4 評価シートを活用した評価・改善（チームまなび）

係名	係の重点目標	具体的方策	具体的方策の評価基準	評価方法	1	2	3	課題と改善策
学力 基 盤	○活用問題に慣れ、解き方のコツをつかむとともに、難しい問題に挑戦することや思考することの楽しさを味わわせ、学びに向かう意欲を高める。	・月に2回程度、国語と算数のチャレンジタイムを設定し、指導方法を工夫して、活用問題を解いたり、解き方を交流したりする。 ・学期に1回程度、重点単元(算数)を設定し、指導計画表を作成して、活用力向上に向けた授業改善を図る。	A 教師評価の平均が3.2以上	学力向上の取組教師アンケート：4件法(項目7)	A			・タブレットでの実施△紙による実施に戻す(印刷の役割分担の明確化) ・習熟度別少人数学習の実施と7年生の効果的活用
			B 教師評価の平均が3.0以上					
			C 教師評価の平均が2.8以上					
			D 教師評価の平均が2.8未満					
係	○家庭学習の習慣化や意欲向上を図るとともに、自主学習の質の向上を図る。	・学期に1回、家庭学習強化週間を設定し、がんばりカードを活用して自己目標の設定や家庭との連携を図る。	A 85%以上の児童が目標を達成した	がんばりカードの目標達成率	B			・速案を活用し、重点単元の日時やねらいをお知らせ ・活用力重点単元一覧表の作成 ・3K通信で実施状況の共有 ・事前事後指導の計画的実施(縦割り活動・自学交流会の継続) ・家庭との連携の強化(学校説明会等での啓発と共通理解) ・評価基準の見直し
			B 75%以上の児童が目標を達成した					
			C 65%以上の児童が目標を達成した					
			D 65%未満の児童が目標を達成した					
			A 自己評価の平均が3.2以上	学校の自				

3段階では、チーム会議で立てられた改善策を、全体会議で確認・共有した。全体会議を設定し、全員に提案し、共有することで、チーム間の連携や学級での実践を徹底したり、改善策の効果を検討し、よりよいものへと共創化されたりするなど、組織全体の取組改善につながるようにした。全体会議では、評価シートを活用して共有化を図るが、別途チームで自主的に改善点を分かりやすくまとめた文書も配付される等、改善策を次の実践につなげようとする意識(協働化)の高さがうかがえた。

以上のように、S・M・Lの3つのサイクルを効果的に機能させることで、取組状況や課題等が繰り返し「共有化」され、共有化を図る中でコミュニケーションや連携等の「協働化」が高まり、それらが循環・融合を繰り返すことによって、より効果ある取組を生みだす「共創化」へとつながった。

(3) チームからだによる「いきいき生活! QOL (クオリティーオブライフ) 週間」の取組

【チームからだ重点目標】

(2) 家庭と連携した生活習慣を見直す取組の推進 ・ 基本的生活習慣の確立

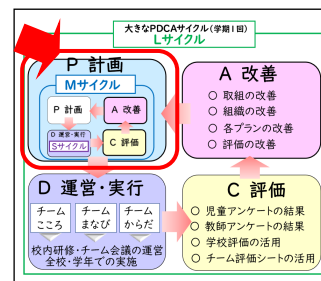
【基本的生活習慣係の重点目標】

○ 自分の生活を振り返り、課題を見つけ、基本的生活習慣の改善を図れるようにする。

① M・Lサイクルの計画(P)段階

校長が学校経営構想で示した教育課題の一つに、「基本的生活習慣の確立」がある。本校の児童は、生活習慣の乱れによる遅刻や欠席が多く、1・2校時の授業に参加や集中できないことが、学力低下の大きな要因となっている。

そこで、学力向上という重点目標を達成するためには、基本的生活習慣の改善が必要であると考え、チームからだによって「いきいき生活! QOL 週間」の取組が企画され、1か月間毎日取り組むことになった。全体で共有化を図るための「計画案」を作成する際は、目標・内容・方法・価値を明確にするとともに、評価が確実に改善策の実行へとつながるように、評価の活用の仕方までを計画するように助言を行っ



た（資料 21）。そのため、担当だけでなく、全員で取組の全容を把握し、協働化に向けて見直しをもつことができた。

5 取組後の評価とその活用

- 「いきいき生活チェック表」の結果をまとめ、チーム会議（からだ）で改善策等を検討し、全体会議におおして共有する。
- 早寝・早起き・朝ごはんの結果をグラフ等にまとめて、保健指導の資料としたり、「からだの掲示板」に掲示したりして、成果や課題を児童と共有し、解決策と一緒に考えられるようにする。
- 結果を保健だよりや学級通信でお知らせし、成果や課題を保護者と共有し、家庭に協力やお願いをする。

資料 21 「いきいき生活QOL週間」計画案に示された評価の活用

児童が毎日自分の生活を振り返って自己評価を行ったり、教員が取組状況を把握したりするために、「いきいき生活チェック表」を作成することにした。チェック表では、児童の生活課題の中から、「就寝時刻」「起床時刻」「朝ごはん」の3つに焦点化して、自己評価をさせることにした。全体提案で共有を図る中で、担任から「生活習慣の乱れには、スマートフォンの使用が大きく関わっているのではないか」という意見が出された。そこで、重点課題の見直しをするために、チーム会議を開き、全担任から児童の生活実態を聞き取ることで、チームまなびの情報教育係と連携してスマートフォンの使用状況を調査することが決まった。調査結果からスマートフォンだけでなく、テレビやゲーム等、メディアの使用時間を改善することが必要であることが明らかになった。そこで、「いきいき生活チェック表」の評価項目に、「メディアの使用時間」を加えて改善し、再度提案を行った（資料 22）。

日	曜	就寝時刻	起床時刻	朝ごはん (○×)	朝ごはんの内容
例	例	夜 9:00	朝 6:30	○	例) パン 野菜ジュース ゆで卵
1	金	夜 :	朝 :		
4	月	夜 :	朝 :		
5	火	夜 :	朝 :		

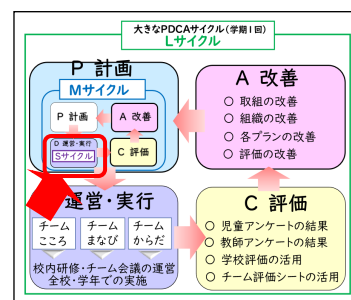
日	曜	就寝時刻 (ねたじこく)	起床時刻 (おきたじこく)	朝ごはん (○・×)	スマホ・タブレット・ゲーム・テレビ 使用(視聴)時間
例	例	夜 9:00	朝 6:30		3 時間
1	金	夜 :	朝 :		時間
4	月	夜 :	朝 :		時間
5	火	夜 :	朝 :		時間

資料 22 「いきいき生活チェック表」の改善

計画（P）段階でも、OODA ループが循環することによって、共有化や協働化の往還が図られ、チーム内外での連携が促進され、実行段階に向けて意識を高めることができた。

② Mサイクル実行（D）段階におけるSサイクルの循環

OODA ループの観察（O）段階では、朝玄関で、担当と一緒に「いきいき生活チェック表」を受け取り、簡単な聞き取りを通して、3つの評価項目について取組状況を素早く把握した（資料 23）。午前中に、担当が自己評価の結果を実態共有シートに打ち込んで保存し、気になる児童のカードに付箋を貼って担任に渡し、取組状況を把握できるようにした。



状況判断（O）の段階では、放課後に、実態共有シートに打ち込まれた結果から、個別の課題や、学年・学校全体の傾向や課題を分析・考察していった。

取組後1週間が経過したが、遅刻状況や朝の眠そうな様子は、変わらなかった。そこで、「生活チェック表」の項目を再度改善し（次頁資料 24）、状況判断する資料として、就寝



資料 23 「いきいき生活チェック表」による状況把握の様子の改善

時刻の約束を守れていない児童の割合と、就寝時刻を過ぎてしていたことを毎日調査して表にまとめることにした（資料25）。その結果、就寝時刻を過ぎてゲームやSNSをしている児童が多いという課題が明らかになった。意思決定に向けて、観察→状況判断の一方通行ではなく、観察と状況判断を往還させながら、課題把握を行うことができた。

意思決定（D）段階では、メディア時間の改善や、メディアの適正な使用について、指導することが決まった。指導の内容や方法については、課題が大きい児童の個別指導を担当が行い、一斉指導については全校で差が出ないように、チームまなびと連携して情報教育担当が行うことになった。

実行（A）段階では、個別の課題については、担当が児童への指導を行うとともに、通信や電話等で保護者と課題を共有し、協力をお願いできるようにした（資料26）。全体的な課題については、文部科学省から出された『情報モラルに関する指導の充実に資する〈児童生徒向けの動画教材、教員向けの指導手引き〉』等を活用し、上学年用・下学年用と分けてプレゼンを作成して、メディアの使い方について指導・意見交流する場を設定した（資料27）。

日	曜	就寝時刻 (ねたじこく)	22時以降 していたこと	起床時刻 (おきたじこく)	スマホ 使用時間	タブレット 使用時間	ゲーム 使用時間	テレビ 視聴時間
例	例	22:00	スマホ ゲーム タブレット ゲーム テレビ 視聴	7:00	1時間	時間	時間	1時間
1	水	:	スマホ タブレット ゲーム ゲーム タブレット ゲーム テレビ 視聴	:	時間	時間	時間	時間
2	木	:	スマホ タブレット ゲーム ゲーム タブレット ゲーム テレビ 視聴	:	時間	時間	時間	時間
3	金	:	スマホ タブレット ゲーム ゲーム タブレット ゲーム テレビ 視聴	:	時間	時間	時間	時間

資料24 「生活チェック表」の再改善

学年	名前	就寝時刻	就寝時刻を過ぎてしていたこと
1	A	21:30	ゲーム
	B	21:50	ゲーム
	C	24:30	ゲーム
	D	23:00	YouTube
就寝時刻を過ぎた1年児童の割合 80%			
2	E	22:00	YouTube
	F	22:00	テレビ
	G	22:00	テレビ

資料25 状況判断するための調査結果資料

担任の先生にお願い!! (チームからだ)

「いきいき生活!QOL 週間」の取組について次回の学年通信に載せてください。
下の文章を参考にして、学年の実態やスペースに応じて書いてください!!
↓(例)

PTAと連携し、全校で基本的な生活習慣の見直しを図るために、「いきいき生活!QOL 週間」の取組を行っています。毎日のチェックありがとうございます。保護者の皆様のご協力で、少しずつ改善がみられるようになってきていますが、まだ、『就寝時刻を過ぎたスマートフォンの使用やゲーム』が課題です。子供たちが生き生きと学校生活を送るために、お家でもメディア機器の使用について、話し合ってみてください!ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

資料26 通信でのお知らせのお願い

[下学年への指導]

ゲームにまよっちゃうと・・・

ゲームいそんになると 授業に集中できなくなる

ゲームのことが頭からはなれない

すいみん不足

昼と夜が逆転して学校を欠席!

ゲームなどを
するときの約束

☆2時間以上は
やらない。
☆8時をすぎたら
やめる。

[上学年への指導]

メディア機器の使い過ぎに気をつけよう

身体面	視力低下・運動不足・腰痛・骨密度低下 栄養の偏り・エコノミークラス症候群など
精神面	昼夜逆転・睡眠障害・むきこもりなど
学業面	成績低下・遅刻・授業中の居眠り 留年・退学など
経済面	浪費・親や友だちのお金を盗むなど
家族関係 対人関係	嘘をつく・家族への暴言・暴力 友人関係悪化・リアルな友だちを失うなど

メディア機器の
上手な活用法

☆はじめをつける
☆仲間で使い方を
考える
☆時間を決めて使う

資料27 課題解決に向けた「メディアの使用」についての指導

指導後は、児童から「ゲーム依存にならないために、ルールを守る」、「夜遅くまでスマホを使うと成長が妨げられると分かったので、時間を決めて使うようにする」といった感想が聞かれた。「いきいき生活チェック表」の自己評価結果（表5）についても、5学年でメディア使用時間が減少し、下学年は「2時間以上はやらない」という約束を全クラスで守ることができた。

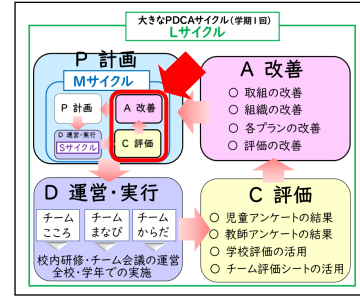
チーム内だけでなく、他チームと横の連携を図り、共有化や協働化を循環させて課題解決を行ったことで、効果ある取組を行うことができた。

表5 メディア使用時間の変容

	平均			
	就寝時刻	起床時刻	睡眠時間	使用時間
1年	21:36 ↓	7:17	9:41	1.2 ↓
2年	21:13 ↓	6:56	9:38	1.4 ↓
3年	21:52 =	7:07	9:15	1.5 ↓
4年	22:12 ↑	6:57	8:45	2.5 ↑
5年	22:10 ↑	6:58	8:48	1.9 ↓
6年	22:59 ↑	7:00	8:01	2.4 ↓
下学年	21:29 ↓	7:03	9:34	1.6 ↓
上学年	22:32 ↑	6:59	8:27	2.2 ↓
全校	22:02 ↑	7:01	8:59	2.0 ↓

③ Mサイクルの評価（C）・改善（D）段階

Mサイクルでは、Sサイクルで整理された結果や成果・課題等を基にして、チーム会議で取組の評価・改善を行った。Sサイクルで、全体的なメディア時間は改善されたものの、個別に見ると、かなり長い時間メディア使用していたり、睡眠時間が短かったりする等の課題があった。その要因として、「帰宅後、時間を意識せずに過ごしている」「自分で考えて行動できていない」といったことが考えられた。そこで、「いきいき生活！QOL週間」の目標に、新たに以下の2つを加え、方策を練り直すことにした。



- 児童が、下校から就寝までの家庭での過ごし方を計画することができるようにする。(タイムマネジメント力の育成)
- 計画したタイムスケジュールを意識して、家庭での過ごし方を児童自身が調整できるようにする。(自己調整力)

チームからだと全担任で合同会議を開いて、どのようにスケジュールを立てさせるかアイデアを出し合った。その結果、6年生の家庭科にあるような、生活時間をマネジメントするための計画表づくりを行うこと、作成にあたっては、兄弟姉妹関係を考慮した縦割り班を構成して、計画表を作成することになった。また、「いきいき生活チェック表」の結果から、これまでの成果と課題を児童と共有する事前指導を行い、計画表を立てる必要感や目的意識をもたせたいと考えた。チームと担任が連携し再度取組の目標や内容・方法、価値を共有化することによって、コミュニケーションが活性化し、アイデアがたくさん出されて、改善案策定（共創化）への好循環が生まれた（資料28）。

「いきいき生活！QOL 週間」改善案

チームからだ 健康安全教育係

～ 省 略 ～

3 実施内容

【事前指導】

- 6日(月) 生活計画表づくり(学活・家庭科) 朝活と1校時
- ・ 全校児童に対して、10月の「いきいき生活チェック」の結果をもとに、強化週間を実施する目的や期間、方法などを説明し、共有する。(ランチルーム)朝活
- ・ 3～4人程度のきょうだいを考慮した縦割り班に分かれて、下校後の家庭での過ごし方を計画する。(各教室)1校時
- ※ 計画・チェック表(資料①) ※ 計画グループ(資料②)

【事後指導】

- 22日(水) 保健指導(学活)「取組結果の交流」

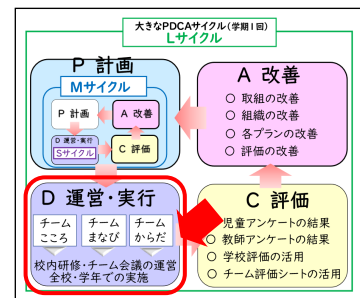
資料 28 協働的な評価活動による改善案の策定

④ Lサイクルの実行（D）段階

Mサイクルで立てられた改善策の実行に向けて、朝活から1校時までの60分間の全校一斉学級活動を設定した。まず、朝活の時間に、事前指導として、次のような内容でプレゼンの作成を行い、一斉指導を行った（資料29）。

- 「いきいき生活！QOL週間」が始まった背景（実態）
- どんな姿にチェンジするのか（ゴール像）
- これまでの取組状況（成果と課題）
- 今後の取組（計画表作成の意義）
- 「いきいきMYスケジュール」のつくり方

次に、以下の3点を留意事項として全員で共有化し、次頁資料30のような「いきいき！MYタイムスケジュール」を作成し、計画を立てていった。



資料 29 計画表作成の事前指導

- 9～10時間の睡眠時間を確保すること
- 下学年は21時、高学年は22時までに就寝すること
- メディア使用時間は1日2時間までとし、寝る1時間前には使用しないこと



作成にあたっては、家庭でのルールや時間の流れが異なるため、家庭内で計画をある程度統一したり、共有したりする必要があると考え、兄弟姉妹関係等を考慮した縦割班を構成し、各班に一人ずつ担当教師を決めて、計画表づくりの支援を行った（資料31）。また、作成された計画表を家庭に持ち帰り保護者と最終調整を行うことで、保護者の参画を促し、連携して取組が推進できるようにした。



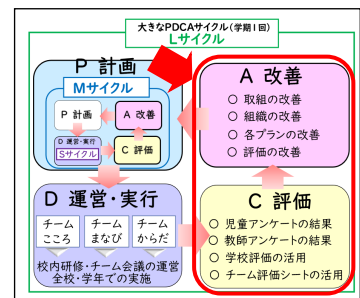
資料31 縦割り班での計画表の作成

教師と児童、児童同士、児童と保護者等で目標・内容・方法等を共有化することで、それぞれの当事者意識を高め、目的意識をもって協働的に取組を進めることができた。

⑤ Lサイクルの評価（C）・改善（A）段階

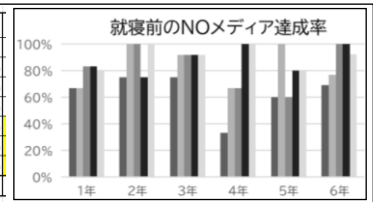
1学期間を振り返った総括評価に向けて、ここでも段階的に評価活動を行った。

1段階の「学力向上研修」では、取組後に実施した児童のアンケートの結果や、取組状況をまとめたもの等（資料32）を資料として、取組の効果を検証し、成果と課題を明らかにしていった。成果として、「計画表作成によって、児童が寝る時間などを意識して生活するようになった」「真木っ子の生活実態が見えるようになり、取組の方向性や見通し



ができた」などの意見が出

学年(平均)	1学期				
	就寝時刻	起床時刻	睡眠時間	メディア	寝る前
1年	21:55	7:06	9:11	1.4	67%
2年	21:48	6:42	8:54	2.3	75%
3年	21:25	7:00	9:34	1.5	75%
4年	22:37	7:13	8:35	2.0	33%
5年	21:54	6:34	8:40	1.8	60%
6年	22:15	6:42	8:26	2.2	69%
平均					



資料32 取組状況をまとめた研修の資料

された。一方で、「自己評価をする児童の基準が曖昧」「課題について指導を行いたいが、時間がない」といった課題が出された。

2段階の「チーム会議」では、評価シートを活用して、取組の評価・改善を行っていく。「学力向上研修」で出された課題の中から、表6のような改善策を話し合った。

表6 評価シートを活用した評価・改善（チームからだ）

係名	系の重点目標	具体的方策	具体的方策の評価基準	評価方法	課題と改善策		
					1	2	3
基本的 生活 習慣 係	○自分の生活を振り返り、課題を見つけ、基本的生活習慣の改善を図ることができる。	・いきいき生活!QOL 週間を実施し、 児童自ら計画表の作成・実行・評価を行って、規則正しい生活ができるようにする。	A 自己評価の平均が3.4以上	いきいき QOL 週間 アンケート :4件法	A	・児童の自己評価の観点の 焦点化・明確化 ・取組に関連する教科の指 導計画の見直し ※計画的実施	
			B 自己評価の平均が3.2以上				
			C 自己評価の平均が3.0以上				
			D 自己評価の平均が3.0未満				
		・生活習慣改善の取組の評価から 成果と課題をまとめ、保健指導に生 かしたり、保護者にお便り等でお知 らせたりして継続的に指導する。	A 児童と保護者に評価を生かした指導ができた	保健便り の発行・ 保健指導 等の実施	A	・保健指導の内容の充実 担任との連携 ・取組結果をまとめる時 間が必要→取組時期や 期間の見直し	
			B 児童・保護者の一方に評価を生かした指導ができた				
			C 取組の評価はできた				
			D 取組はできた				

全体会議での共有化や共創化に向けて、改善策が具体的に見えるように、チームで具体的な方策をまとめた文書や資料づくりを行った。次頁資料33のように、学期ごとに重点課題

を設定し、課題に応じて児童が自己評価できるように、「いきいきMYスケジュール」に観点を明記する具体案をつくった。また、事前指導については、保健指導と合わせて実施することで時数を確保するようにした。さらに、学期末の長期休業前に、来学期の計画表を作成することで、夏休みや冬休みの生活改善にも生かせるように工夫した。

1日のふりかえり	4日(げつ)
夜の9時までに寝た	○・×
寝る1時間前はメディアの使用をしなかった	○・×
メディアの使用を1日2時間までにすることができた	○・×

資料 33 「いきいきMYスケジュール」での評価の観点を明確化

3段階の「全体会議」では、具体化された改善案を全員で共有化した。事後指導については、計画的かつ確実に実施するために、次年度は、教育指導計画書の年間指導計画表に位置づけるというよりよい案が出

月	7月	事前指導(担当)
学活	○学級集会をしよう	計画表づくり(縦割り班活動)
	○夏を元気に過ごそう(保)	
	○いきいきMYタイムスケジュール	学級指導(担任)
	○充実させよう夏休み	
	4 15	

資料 34 R4教育指導計画(年間指導計画)への反映

され、令和4年度の教育指導計画書に反映された(資料34)。段階的に評価活動を行うことで、多くの対話が生まれ、十分に成果と課題が把握されて共通認識となり、学校全体のプランの更新まで共創化することができた。

以上のように、それぞれの取組でS・M・Lが循環していくことで、共有化・協働化・共創化の質も高まっていき、重点目標達成に向けた効果ある取組を実行することができた。

7 全体考察

(1) 教員意識アンケートの結果から

表7 「共有化」「協働化」「共創化」に関わる意識調査の結果の変容

(期日) 1回目:R3.4 2回目:R4.2 (対象) R3年度在籍教員(非常勤・管理職を除く)12名 (方法) 4年法		評 価 項 目			4月	2月	変化
共有化	目 標	① 学校の重点目標を共有できている。	2.58	3.92	↑1.34		
		② ゴール像を共有できている。	2.58	3.83	↑1.25		
	内容・方法 価 値	③ 学力向上に向けた取組の内容や方法を共有できている。	2.67	4.0	↑1.33		
		④ 今年度の取組は、重点目標達成のために意義あるものだと考えている。	3.17	4.0	↑0.83		
協働化	役割分担	⑤ チーム(部)での自分の役割を理解している。	3.08	3.75	↑0.67		
	コミュニ ケーション	⑥ 自分のチーム(部)のメンバーや、他のチーム(部)のメンバーと協力して活動している。	2.83	3.67	↑0.84		
		⑦ チーム会議や研修では、自分の考えを言ったり、聞いたりしてもらえる。	3.5	3.67	↑0.17		
	モチベーション	⑧ 取組の提案に沿って、確実に実施することができている。	2.83	3.92	↑1.09		
共創化	成果・課題 の把握 対 話	⑨ 取組後は評価を行い、成果や課題をつかむことができている。	2.75	3.83	↑1.08		
		⑩ 研修や会議で、課題を解決するための改善策を考えたり、話し合ったりすることができている。	3.0	4.0	↑1.0		
	共通認識	⑪ みんなで、よりよい取組を創り出そうとする雰囲気がある。	3.0	3.67	↑0.67		
		⑫ 研修や会議で出された改善策は、次の実践に生かされている。	2.67	3.75	↑1.08		
チーム化のよさ	⑬ 組織的に取り組むことは、重点目標達成のために効果があると思う。	3.08	3.92	↑0.84			

令和3年4月にとった教員意識アンケートを令和4年度2月にも実施し、評価項目をチーム化の3つの条件と、その条件化の具体的要素に整理して、比較を行った。表7のとおり、「共有化」「協働化」「共創化」は全ての項目で4月より平均値の上昇が見られ、この結果が

ら、本校のチーム化は促進されたと言える。特に、課題であった「目標・内容・方法の共有」「モチベーション」「成果や課題の把握」「共通認識」については、1ポイント以上の上昇が見られた。これは、3サイクル評価システムが効果的に機能することで、「共有化」と「協働化」が往還しながらそれぞれの要素を高め合い、「共創化」を生み出した結果だと考える。

(2) 取組の成果と課題についての自由記述から

重点目標達成に向けたプロジェクトの取組について、成果と課題を自由記述したものをテキストマイニング (KH Corder) によって「共起ネットワーク図」に表し、分析を行った。

図8の中の1郡では、大きめのバブルが双方に共起しており、「学校」「全体」で「取り組む」ことが「学力」「向上」につながっていると考えていることが分かる。2郡では、「全員」を中心に、ねらいや内容、方法等が「共通理解」と強く共起(上部)し、「全員」で実施することが、「目標」や「向かう(方向)」へと共起を広げている(下部)。3郡では、2郡における「全員」での「協働」や「共通理解に基づいた実施」によって「効果」が「上がる」と考えられており、その取組によって「子供」の「意欲」や「達成感」が高まったことが分かる。これらの分析から、真木小式3サイクル評価システムを効果的に機能させたことで、学校のチーム化を促進させ、重点目標達成を図る上で有効であったと考える。

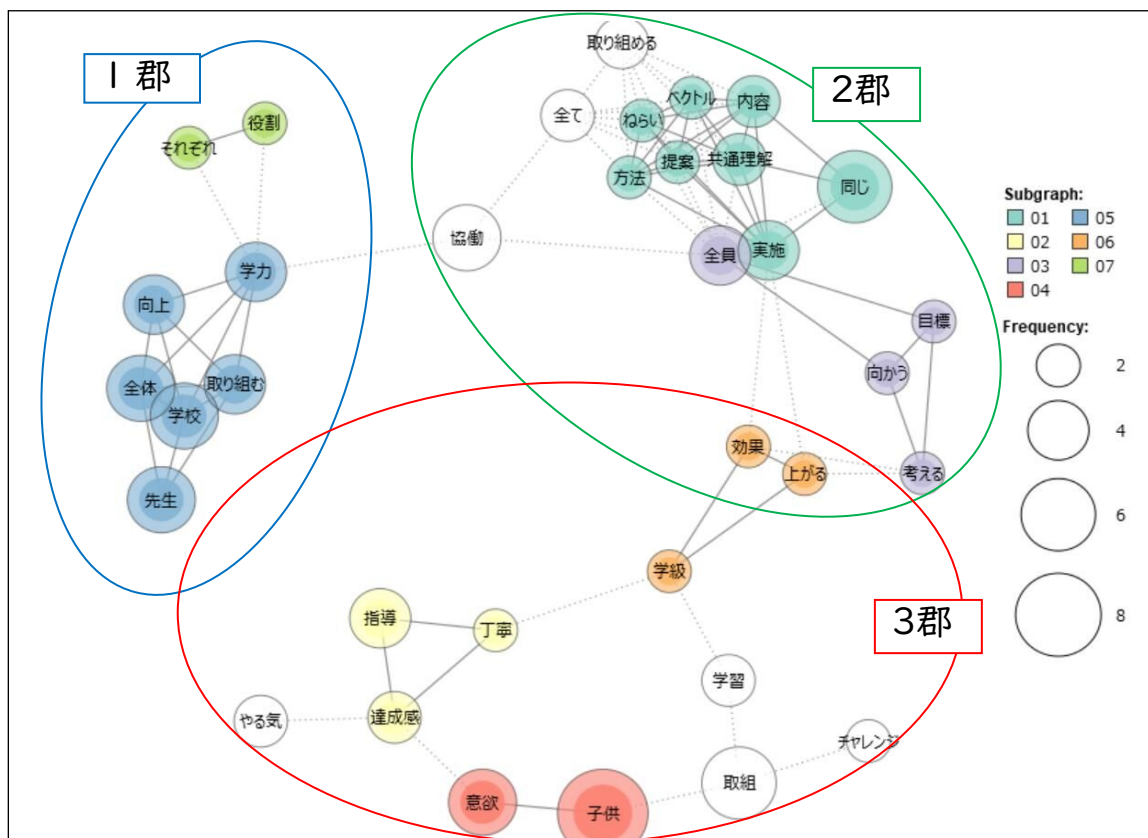


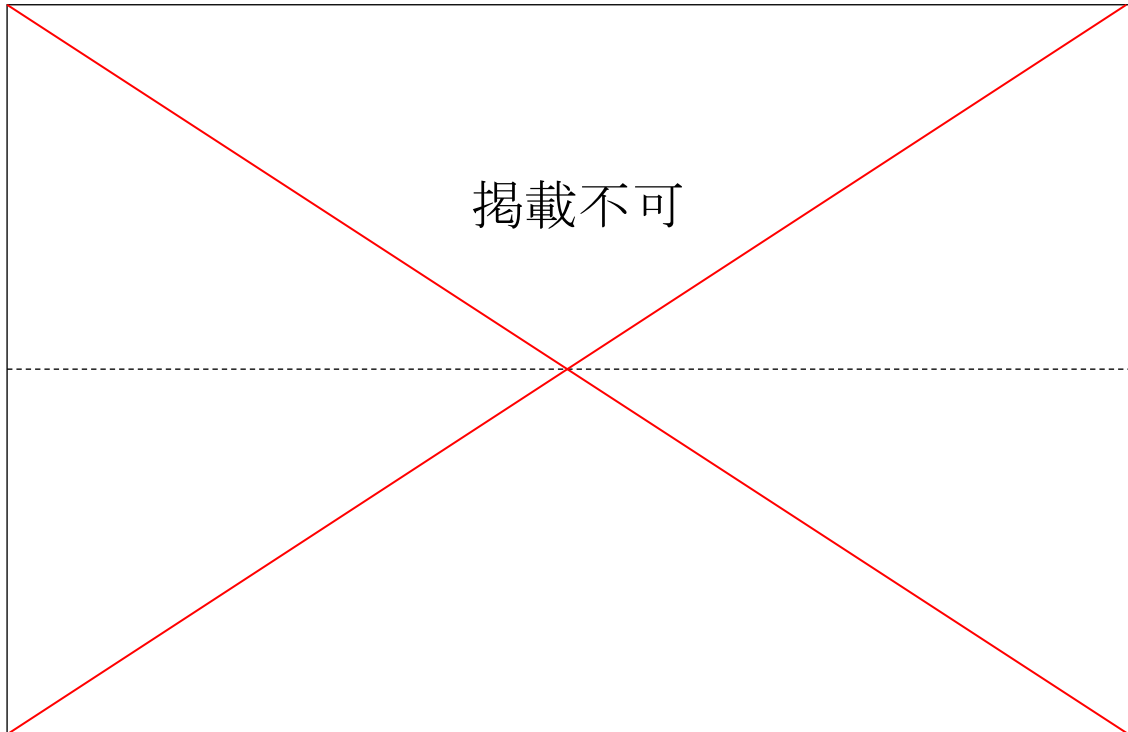
図8 成果と課題についてのテキストマイニングによる共起ネットワーク図

(3) 児童の変容から

① 標準学力検査の結果から

例年12月末に実施している標準学力検査の各学年における標準スコア(全国平均を50として標準化)の経年変化をまとめた。次頁資料35のとおり、全ての学年において国語、算数ともに標準スコアが上昇し、過去5年間で最も高い数値となった。1段階児童の割合

については、国語が 56%、算数が 34%減少し、「一人一人の児童の標準スコア 3 ポイントアップ」という成果指標についても、国語は 91.7%、算数は 77.1%の児童が達成できた。これは、「共有化」と「協働化」の往還・融合によって、より質の高い取組へと更新し続けたこと（共創化）が有効だったと考える。



資料 35 標準学力調査の結果と 1 段階児童の割合の変容（国語・算数）

② 出席・遅刻状況から

表 8 は、令和 2 年度と令和 3 年度の「遅刻」と「欠席」の人数と割合を、同一学年（令和 2 年度 1～5 年生と令和 3 年度の 2～6 年生）で比較したものである。取組前に比べて遅刻や欠席をする児童が

表 8 遅刻・欠席状況の比較

大きく減少した。特に、遅刻をする児童の割合が 4.7%も減少した。これは、チームからだが実施した「いきいき生活！

	述べ人数			割合		
	R2	R3	変化	R2	R3	変化
遅刻	596	162	-434	6.3%	1.6%	-4.7%
欠席	351	122	-229	3.7%	1.2%	-2.5%

QOL 週間」の取組によって、基本的な生活週間の改善が図られたことや各チームの取組によって、学習意欲の向上や達成感・成就感を得られたためだと考える。児童の取組状況や取組結果を繰り返して共有化し、チーム会議や学力向上研修等で要因分析や考察を丁寧に行い、より効果ある取組を全員で創り上げてきた結果であると考え。

（４）管理職による評価から

次頁資料 36 は、重点目標達成に向けたプロジェクトチームの取組について、校長、教頭が評価したものである。この評価からも、真木小式 3 サイクル評価システムを効果的に機能させることによって、「共有化」「協働化」を往還・融合させ「共創化」を生み出し、好循環しながら連続・発展させたことは、学校のチーム化を促進する上で有効であったと結論づける。

厳しい実態の把握，一つ一つの取組の目標・内容・方法等の丁寧な共有によって，組織的に取り組むよさを全教員が納得・理解して，徹底して実施することができた。みんなで創り出した取組によって，子供の学習意欲の向上や出席状況の改善が見られた。（教頭評価）

3Kスローガンのもと，各チーム内において役割分担が進み，教職員の日常的なコミュニケーションが活発になり，モチベーションもあがって組織的な取組が徹底されてきた。その結果，児童の姿に変容が起こり，本年度の重点目標は十分に達成できたと考える。（校長評価）

資料 36 プロジェクトチームの取組に対する管理職の評価（一部抜粋）

8 成果と課題

学校のチーム化を目指し，主幹教諭として，真木小式3サイクル評価システムを構築し効果的に機能させることによって，次のようなことが明らかになった。

（1）研究の成果

- 学校のチーム化と3サイクル評価システムが機能する環境整備のためには，当事者意識の高揚（スローガンの作成・評価シートの作成等），見通しを持たせること（活動計画一覧表・ハンドブックの作成等），見える化を図ること（掲示板の活用・通信の発行等）が有効である。
- 「共有化」と「協働化」の往還・融合を図るSサイクルを効果的に循環させるためには，素早く，臨機応変に改善・実行ができるように，実施状況の把握・分析・公表を行うことが有効である。
- 「共有化」と「協働化」の往還・融合から「共創化」へと高めていくMサイクルを効果的に循環させるためには，事前の打合せ・協議内容の焦点化・役割分担の明確化・事後の見届け（フォロー）等に留意したチーム会議の運営・実施が有効である。
- 「共創化」を連続・発展させるLサイクルを効果的に循環させるためには，全教員による取組の成果と課題を分析・把握する校内研修をもとに，チーム会議，全体会議と段階的に評価活動（取組の評価・改善案の策定・再計画の立案）を繰り返していくことが有効である。

（2）今後の課題（方向性）

- 本研究ではOODAループをMサイクルの実行（D）段階に位置づけたが，Lサイクルの計画（P）段階や，実行（D）段階でも循環することが明らかになったので，OODAループの効果的な位置づけをさらに検証していく。
- 方向性は同じとしながらも，一人一人の個性や強みを生かした共創化が図れるようにダイバーシティマネジメントを取り入れた評価システムの在り方を検討する。
- 学校内のチーム化を基盤として，地域，保護者との「共有化」「協働化」「共創化」が図れるような評価システムを再構築していく必要がある。

<参考文献>

- ・ 福岡県教育センター（2016）「学校変革の決め手：学校のチーム化を目指すミドルリーダー20の行動様式」ぎょうせい
- ・ 篠原清昭（2012）「学校改善マネジメント：課題解決への実践的アプローチ」ミネルヴァ書房
- ・ 入江仁之（2019）「OODAループ思考 [入門]」ダイヤモンド社